弘前医療福祉大学紀要　4(1), 55 − 61, 2013

〔教育実践報告〕

看護学生の臨地実習における学習実態調査
―「慢性期看護学（成人）実習Ⅰ」を経験した２年次生の学習状況の実際 ―

村上　大介[1)]、成田　　智[2)]、長谷川秀隆[1)]、塩谷　千晶[1)]、矢嶋　和江[1)]

要　　旨

目的：看護学科２年次生の臨地実習での学習状況を明らかにし、実習指導の向上に役立てる。方法：看護系大学保健学部看護学科２年次生 32 名を対象に、臨地実習前後に自由記述式の自記式質問紙調査を実施した。得られた記述内容を「実習に対する思い」、「実習を通して感じたこと」という観点でカテゴリー化した。結果：対象者32名中、実習前17名（53.1％）、実習後21名（65.6％）から回答が得られた。結論：実習前には期待と不安があった。直前に行った演習が影響し、看護過程、看護技術について関心が集中した。実習施設が広範囲に点在するため、移動距離による不公平感があった。実習後の結果から２年前期の知識で実習を展開することが困難であった可能性があり、達成感の少なさにつながっている可能性がある。一方、自身の成長を実感し充実感も得ている学生もおり、実習環境がかかわっている可能性が示唆された。

キーワード：看護学生、臨地実習、学習の実態

Ⅰ．はじめに

看護教育は、保健師助産師看護師学校養成所指定規則の改正に伴い、実習時間の減少が見られ、2008年の改正においても、成人看護学の臨地実習が２単位減となり[1)]、成人看護学の実習期間が減少した。このため、臨地実習における教育を、短期間でより効果的に行う必要があると考えられる。

看護系大学は平成24年の時点で209校となっているが[2)]、その増加（私大、国公立大）に伴い、カリキュラム構成も多様化している。当大学も例外ではなく、独自のカリキュラムを編成している。また、複数の看護系大学が集中するという地域的な特徴もあり、これまで３年次に行われることの多かった、成人看護学慢性期の実習を２年次前期という早期に行っている。

本学の２年次生に、実習の事前学習として、フィジカルアセスメント、ペーパーペイシェントによる看護過程の演習（情報収集、アセスメント、看護診断のシミュレーション）を行った。その結果、基本的な知識が十分ではなく、技術の獲得、看護過程の理解が困難であった学生が少なくなかった。そのような現状で、学生が実習を通して、実習による学習に満足しているか、問題点としてどのようなことを考えているかを明らかにすることで、今後の実習指導の向上に寄与することが出来ると考える。

Ⅱ．目　的

看護系大学保健学部看護学科２年次生の、臨地実習での学習状況を明らかにし、今後の実習指導の向上に寄与することを目的とする。

Ⅲ．方　法

1．対　　象：看護系大学看護学科２年次生（１期生）32名
2．調査期間：平成22年６月21日～平成22年８月３日
3．方　　法：自記式質問紙調査（自由記述式）留置法
　1）データ収集方法：実習前用、実習後用の質問紙を作成し、研究の目的、内容について口頭で説明した後、自作の質問紙を配布した。実習開始前と実習終

1）　弘前医療福祉大学保健学部看護学科（〒 036-8102 弘前市小比内 3-18-1）
2）　弘前医療福祉大学保健学部医療技術学科（〒 036-8102 弘前市小比内 3-18-1）

了後に、それぞれの質問紙を配布し、回収した。回収のために、回収ボックスを設置した。回収ボックスの設置期間は実習前５日間（６月21日～25日）、実習後２日間（８月２日～３日）とした。

２）調査内容：質問紙に以下の項目を設け、自由記載とした。

実習前質問紙：「学びたい」、「やりたい」、「不安だ」、「こうしてほしい」、その他

実習後質問紙：全体を通しての感想、「学び」、「やりたい」ことが出来たか、「不安」の変化、「実習を経験してよかった」、「こうしておけばよかった」、「こうしてほしい」

３）分析方法：実習前：「実習に対する思い」、実習後：「実習を通して感じたこと」という観点で、得られた記述内容から一つの意味のある文章をデータとし、その内容を分析した。分析の際は、共同研究者との検討を重ね、信頼性の確保に努めた。

4．倫理的配慮：質問紙を配布する際に、質問紙の回収をもって研究への同意とすること、自由意思による回答であり、成績には関与しないこと、回答しないことで不利益を被ることは無い旨を口頭で説明した。

Ⅳ．結果

対象者32名中、実習前17名（53.1％）、実習後21名（65.6％）から回答が得られた。

以下コードを［　］、サブカテゴリーを〈　〉、カテゴリーを【　】で示す。

１．実習に対する思い

実習前に配布、回収した質問紙の内容を分析した結果、99個のデータが得られ、27個のコード、12個のサブカテゴリー、４つのカテゴリーが得られた。（表１）

１）【実習で得られることへの「期待」】には、〈看護過程の理解を深めたい〉、〈慢性期患者の特徴を理解したい〉、〈看護技術を実践したい〉、〈コミュニケーションを通して良い関係を築きたい〉、〈病院の施設・システムを学びたい〉の５つのサブカテゴリーが含まれた。

［看護の根拠を学びたい］、［アセスメントの理解を深めたい］、［看護計画を実施したい］というコードから〈看護過程の理解を深めたい〉というサブカテゴリーが抽出された。また、〈慢性期患者の特徴

表１　実習に対する思い

（人）

カテゴリー	サブカテゴリー	コード	数
実習で得られることへの「期待」	看護過程の理解を深めたい	看護の根拠を学びたい	1
		アセスメントの理解を深めたい	5
		看護計画を実施したい	2
	慢性期患者の特徴を理解したい	慢性期患者の特徴を理解したい	3
	看護技術を実践したい	学習した技術を実践したい	19
	コミュニケーションを通して良い関係を築きたい	コミュニケーションを通して良い関係を築きたい	7
	看護師の役割を理解したい	他職種との連携を理解したい	2
		看護業務の実際を学ぶ	3
	病院の施設・システムを学びたい	病院の施設・システムを学びたい	7
		カテゴリー別データ数小計	**49**
実習に対する「意気込み」	充実した実習にしたい	これまでの実習経験を活かしたい	5
		自己管理をして臨みたい	1
		充実した実習にしたい	10
		自分も成長したい	1
		看護することで得られる喜び	1
		頑張りたい	1
		根拠のある指導をしてほしい	5
		カテゴリー別データ数小計	**24**
実習に対する「不安」	自身の技術・能力に不安がある	看護過程が上手く展開できるか	2
		記録をまとめることが出来るか	4
		看護師や患者とコミュニケーションが上手く取れるか	2
		技術面は演習で不安になった	2
	自己管理に不安がある	自己管理が出来るか	2
	実習環境に不安がある	指導者による意見の違い	4
		スタッフや患者がどのような人か	2
		受け持ち患者が変わらないか	1
	全てが不安だ	全てが不安	2
		カテゴリー別データ数小計	**21**
実習環境に対する「不公平感」	実習環境に対する不公平感がある	実習場所が不公平	4
		実習前準備の不満	1
		カテゴリー別データ数小計	**5**
		データ数合計	**99**

を理解したい〉という期待があった。また、多くの学生が〈看護技術を実践したい〉という内容を回答していた。そのほか、〈コミュニケーションを通して良い関係を築きたい〉、［他職種との連携を理解したい］や［看護業務の実際を学ぶ］など〈看護師の役割を理解したい〉という思い、〈病院の施設・システムを学びたい〉という思いが示された。

2）【実習に対する「意気込み」】では、［これまでの実習経験を活かしたい］、［充実した実習にしたい］のほか、［自分も成長したい］、［看護することで得られる喜び］などの〈充実した実習にしたい〉という思いが示された。

3）【実習に対する「不安」】では〈自身の技術・能力に不安がある〉、〈自己管理に不安がある〉、〈実習環境に不安がある〉、〈全てが不安だ〉という4つのサブカテゴリーが抽出された。

［看護過程が上手く展開できるか］、［記録をまとめることが出来るか］、［技術面は演習で不安になった］などの実習で実施する記録や技術など、〈自身の技術・能力に不安がある〉というサブカテゴリーが抽出された。また、遅刻や体調管理などの不安として、〈自己管理に不安がある〉があった。［指導者による意見の違い］や［スタッフや患者がどのような人か］など、〈実習環境に不安がある〉という結果となった。また、〈全てが不安だ〉という思いもあった。

4）【実習環境に対する「不公平感」】では、〈実習環境に対する不公平感がある〉という思いが示された。

2．実習を通して感じたこと

実習後回収出来た質問紙を分析した結果、201個のデータが得られ、4つのカテゴリー、22個のサブカテゴリー、39個のコードが得られた。（表2）

表2　実習を通して感じたこと

（人）

カテゴリー	サブカテゴリー	コード	数
実習経験を通して得た「学び」	看護過程の理解ができた	看護過程の展開の仕方が分かるようになった	9
	援助を通して自分自身が学んだ	援助を通して自分自身が学んだ	3
		技術の実施を通して学んだ	2
	対象の理解が進んだ	対象の特徴を理解できた	3
		受け持ち患者の疾患を理解出来た	2
	報告の大切さが分かった	報告の大切さが分かった	1
	根拠に基づくケアの大切さが分かった	根拠となる情報の大切さが分かった	6
		その人に合ったケアの大切さを学んだ	6
	コミュニケーションの大切さを学んだ	コミュニケーションの大切さを学んだ	7
	自分に不足していることに気付いた	看護技術を高める必要がある	2
		コミュニケーション技術を勉強する必要がある	2
		自分に足りないことが分かった	4
		グループ内の協調性が足りない	2
		カテゴリー別データ数小計	**49**
実習で得られた「充実感」	患者の反応の変化が嬉しかった	患者の反応の変化が見られて嬉しかった	9
	成長が実感でき自信となった	勉強した事を実践し自信になった	7
		自身の能力が向上し充実感を得られた	9
	実習環境に助けられて実習が充実した	周囲の協力により実習の充実感が得られた	17
		図書館が長く使えて役立った	1
		これからもっと頑張りたい	6
		貴重な経験ができた	18
	看護師の仕事が理解出来た	看護業務を体験し理解出来た	3
	学習した内容を実践できた	学習した内容を実践できた	3
		カテゴリー別データ数小計	**73**
実習における「困難感」	それぞれの思いや立場があり戸惑った	指導者の意見の違いに混乱した	5
		スタッフが忙しそうでコミュニケーションがとりにくかった	2
		それぞれの思いが違って難しい	1
		実習指導者のアドバイスがほしかった	2
	期間が短くて大変だった	期間が短く大変だった	3
		結果が見えず達成感が少ない	2
	知識不足で実習が難しかった	記録の書き方が分からない	6
		知識不足で難しかった	13
	コミュニケーションをとるのに苦労した	コミュニケーションをとるのに苦労した	8
	看護過程が上手く展開できなかった	看護過程が上手く展開できなかった	6
	実習前不安があった	看護過程の不安があった	1
		コミュニケーションが不安だった	2
		記録物が書けるか不安だった	2
		カテゴリー別データ数小計	**53**
実習後の「心残り」	受け持ち以外の患者と交流したかった	受け持ち以外の患者と交流したかった	8
	技術をもっと実践したかった	看護技術を実践したかった	5
	指導者が参加してほしかった	指導者にカンファレンスに参加してほしかった	1
	積極的に実習すればよかった	積極的に指導者に聞けばよかった	9
		積極的に実習に参加すべきだった	3
		カテゴリー別データ数小計	**26**
		データ数男女別合計	**201**

1）【実習経験を通して得た「学び」】では、〈看護過程の理解ができた〉、〈コミュニケーションの大切さを学んだ〉、〈援助を通して自分自身が学んだ〉、〈対象の理解が進んだ〉、〈報告の大切さが分かった〉、〈根拠に基づくケアの大切さが分かった〉、〈自分に不足していることに気付いた〉の７つのサブカテゴリーが示された。

中でも、［根拠となる情報の大切さが分かった］、［その人に合ったケアの大切さ］というコードが目立ち、〈根拠に基づくケアの大切さが分かった〉というサブカテゴリーが得られた。

2）【実習で得られた「充実感」】では、〈患者の反応の変化が嬉しかった〉、〈成長が実感でき自信となった〉、〈実習環境に助けられて実習が充実した〉、〈看護師の仕事が理解出来た〉、〈学習した内容を実践できた〉の５つのサブカテゴリーが示された。特に実習で［周囲の協力により実習の充実感が得られた］、［貴重な経験ができた］という回答が目立った。

3）【実習における「困難感」】では〈それぞれの思いや立場があり戸惑った〉、〈期間が短くて大変だった〉、〈知識不足で実習が難しかった〉、〈コミュニケーションをとるのに苦労した〉、〈看護過程が上手く展開できなかった〉、〈実習前不安があった〉の６つのサブカテゴリーが得られた。中でも、〈知識不足で実習が難しかった〉と記述した学生が目立った。

4）【実習後の「心残り」】では、〈受け持ち以外の患者と交流したかった〉、〈技術をもっと実践したかった〉、〈指導者が参加してほしかった〉、〈積極的に実習すればよかった〉という4つのサブカテゴリーが得られた。中でも、〈受け持ち以外の患者と交流したかった〉、〈積極的に実習すればよかった〉という内容の回答をした学生が目立った。

Ⅴ．考　察

１．実習への期待と不安

【実習で得られることへの「期待」】の中には、〈看護過程の理解を深めたい〉や、〈慢性期患者の特徴を理解したい〉という理解への期待が示された。これは、慢性期看護学（成人）実習Ⅰの目標である、慢性期にある患者の理解、看護過程の展開方法の理解が、参加した学生の一部には理解され、それを学習する期待として表れている可能性が示唆された。その背景には、実習前に行った看護過程、看護技術の演習が影響している可能性がある。この他、看護技術の実践やコミュニケーション技術を活用しての関係作りなどが示された。２年次までの実習経験は、１年次の看護学基礎実習（見学実習）、生活援助実習（１人の患者を受け持つ実習）であり、その経験が実習のイメージに影響している可能性がある。

【実習に対する「意気込み」】では、［充実した実習にしたい］という漠然とした目標を持つ学生がいる一方、［看護することで得られる喜び］や、［これまでの実習経験を活かしたい］など、より具体的な目標を持って実習に臨む学生もおり、学生により差はあるが、前向きな気持ちを抱いていることが示唆された。

【実習に対する「不安」】では、自分自身の技術・能力に対する不安があることが分かった。この要因として、実習直前まで講義があり、学習内容を十分に振り返る時間も少ないこと、課題が集中すること、それに伴い、個人の技術を練習する時間が持ちにくいことが影響している可能性がある。これに加え、２年前期の段階でまだ疾患の学習が十分に進んでおらず、知識が不足しがちであり、自身の能力への不安へつながっている可能性がある。

それに対し、実習環境への不安も示された。［スタッフや患者がどのような人か］というコードは、スタッフや患者との信頼関係構築に不安が示されている。また、［指導者による意見の違い］では、実習を進める上で指導者によっては指導内容が異なることがあり、学生が混乱することを不安に思っていることが分かった。さらに、［受け持ち患者が変わらないか］というコードから、実習の途中で受け持ち患者が変更され、十分に受け持ち患者と関わることが出来なくなることに不安を抱いていることが示された。これらの不安にはこれまでの実習による経験が反映され、具体的に起こりうる問題への恐れが表れていると考えられる。また、［全てが不安］というコードには、学生の正直な心情が表れている。

これらのことから、実習に対し、期待や意気込みなどの前向きな感情がみられる一方、強い不安も抱いていることが明らかである。

２．実習環境の違いによる影響

【実習環境に対する「不公平感」】については、看護大学が一部地域に集中する地域特性もあり、実習施設が多数であり広範囲に点在するため、距離が遠い場合もある。そのため、必ずしも学生にとって通いやすい環境ではない現実がある。その費用負担も学生により違うため、このような不公平感へつながったと考えられる。費用負担については、積立等の工夫も考えられるが、実習施設への移動距離による不公平感は明らかである。

３．実習での困難と心残り

【実習における「困難感」】では、指導者の間で意見が違い混乱した様子や、スタッフの忙しさから声をかけにくい状況が学生に生じていることも示された。特に、指

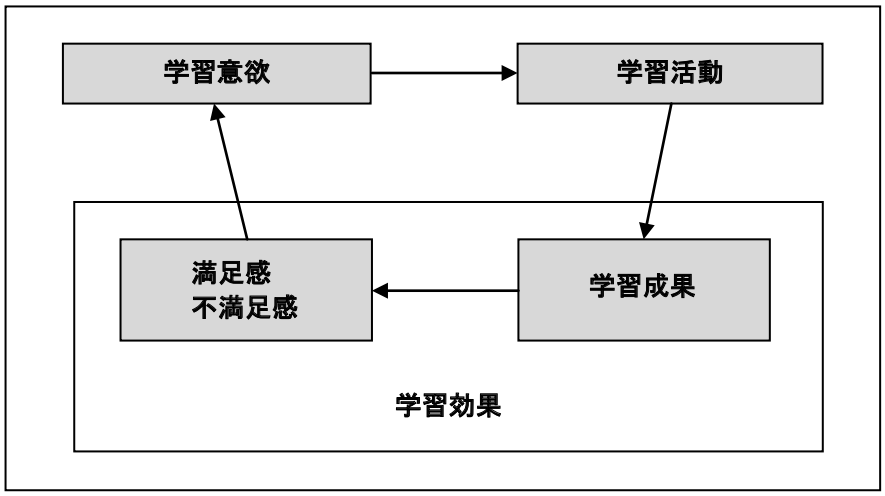

図１　学習意欲と学習活動，学習効果の関係[3)]

導者間での意見の違いは、実習前の不安の一つとして、コードに表れていることから、不安が現実化した結果となり、実習に対するネガティブなイメージにつながる可能性がある。

また、〈知識不足で実習が難しかった〉というサブカテゴリーから、２年前期という段階での知識で、看護過程や実習をスムーズに展開することが困難であった可能性がある。そのため、計画立案がずれ込み、実施評価した時点で明確な変化が現れない場合も多くなり、[結果が見えず達成感が少ない]という結果へつながったと考えられる。これらの状況が〈期間が短くて大変〉という思いにつながっていると考えられる。

そのような背景から、実習終了後の心残りがあったことも理解できる。特に、積極性の不足については実習指導者からも度々指摘されることであり、学生自身も同様の印象を抱いていることが分かった。その要因として、前述の困難感から積極的に実習に取り組めなかった可能性がある。

また、技術については、受け持ち患者によって実施出来る看護技術は限られるが、慢性期看護に特徴的な患者教育という点はあまり認識されていない可能性が示唆された。さらに、受け持ち以外の患者との交流など、実習目的とはややずれが生じるような結果も得られたが、同じ病室にいる患者に声をかけられることもあり、その対応を十分に出来ないことで、このような思いが示されたと考えられる。

４．実習を通して得られた学びと充実感

【実習経験を通して得た「学び」】、【実習で得られた「充実感」】では、慢性期看護学（成人）実習Ｉを通して、看護過程の理解、根拠に基づくケアの大切さ、コミュニケーションの大切さに関する学びを得られたことが示された。一方で、患者への援助を通して自分自身が学んだ経験など、自分自身を客観視し、患者を尊重することも学んでいることが分かった。

これらの学びから、自分自身の成長が実感され、学習内容を実践できたことで、実習の充実感となっていることが分かる。また、これらの充実感を得るのに、実習環境が大きくかかわっている可能性が示唆された。周囲の協力として、実習施設のスタッフの受け入れや教員との協力体制があり、貴重な経験が出来た場合や、図書館の開館時間延長など、実習・学習環境が充実していると、充実感が得られる可能性が高いと考えられる。杉森らは、学習意欲と学習活動、学習効果の関係が循環していることを示している[3)]。（図１）これらのことから実習における充実感は満足感となり、学習意欲へとつながっていく可能性が示唆された。

Ⅵ．結　論

１．【実習で得られることへの「期待」】、【実習に対する「意気込み」】、【実習に対する「不安」】から、実習に対する期待と不安があり、関心が集中したのは、看護過程、看護技術についてであり、直前に行った演習が意識づけになった可能性がある。

２．【実習環境に対する「不公平感」】から、実習施設が多数であり広範囲に点在するため、実習施設への移動距離による不公平感があることが分かった。

３．【実習における「困難感」】、【実習後の「心残り」】から、２年前期の知識で、看護過程や実習をスムーズに展開することが困難であった可能性があり、計画立案がずれ込み、結果が見えず達成感が少ない状況が、学

生自身の期間が短いという思いにつながっていると考えられる。

4．【実習経験を通して得た「学び」】、【実習で得られた「充実感」】から、自分自身の成長が実感され、学習内容を実践できたことで、実習の充実感となっており、実習施設の受け入れや学習環境などの実習環境が大きくかかわっている可能性が示唆された。

Ⅶ．研究の限界

開学後初めての実習での調査であり、その後の実態を反映するものではない。また、実習直前での短期間での調査であり、回答者への配慮として質問項目を設けたが、そのことにより、結果に偏りを与えた影響がある可能性は否定できない。今後、継続して調査を行い、さらなる実態の解明が望まれる。

謝　辞

本研究にご協力いただいた学生の皆様に深く感謝申し上げます。なお、本研究は弘前医療福祉大学平成22年度学長指定研究助成を受けて実施した。

（受理日　平成 25 年 3 月 6 日）

引用文献

1）杉森みど里，舟島なをみ：看護教育学（第 4 版増補版）．92．東京：医学書院．2009

2）日本看護系大学協議会(JANPU)：http://janpu.or.jp/kango/index.html

3）杉森みど里，舟島なをみ：看護教育学（第 4 版増補版）．211．東京：医学書院．2009

参考文献

福井　至：図解による学習理論と認知行動療法（第 1 版）．東京：培風館．2008

原田秀子：隣地実習における看護学生の達成感に影響する要因の検討．山口県立大学看護学部紀要．8：93-98．2004

ホロウェイ，ウィーラー：ナースのための質的研究入門（第 2 版）．野口美和子．東京：医学書院．2006

クラウス・クリッペンドルフ：メッセージ分析の技法（第 1 版）．三上俊治，椎野信雄，橋元良明．東京：勁草書．1989

小山美恵，山崎和子，長谷川　純ほか：言語聴覚氏を目座苦学生の臨床実習経験―アンケート結果の検討―．人間と科学 県立広島大学保健福祉学部誌．8(1)：66-77．2008

佐藤郁哉：質的データ分析法（第 1 版）．東京：新曜社．2008

武井　圭，杉本　諭，猪俣高志ほか：学内検査実習前後における検査能力自己達成度および実習満足度の検討．理学療法科学．22(1)：83-87．2007

竹村明子：実践教育の効果：介護福祉養成課程における実習体験と介護への自己決定性の関係．教育心理学研究．58：176-185．2010

内田陽子，新井明子，小泉美佐子：学生の老年看護学実習についての評価―学生のやる気を高める条件―．群馬保険学紀要．25：93-103．2004

山内光哉，青木　豊：グラフィック学習心理学 行動と認知（第 1 版）．東京：サイエンス社．2001

The actual learning situation of 2nd-year nursing students during clinical training in chronic nursing I (adults)

Daisuke Murakami [1)] Satoru Narita [2)] Hidetaka Hasegawa [1)] Chiaki Shioya [1)] Kazue Yajima [1)]

1) **Department of Nursing, School of Health Science, Hirosaki University of Health and welfare (3-18-1 Sanpinai, Hirosaki 036-8102, Japan)**
2) **Department of Medical Technology, School of Health Science, Hirosaki University of Health and welfare (3-18-1 Sanpinai, Hirosaki 036-8102, Japan)**

Abstract

Purpose: Clarifying learning during clinical training in 2nd-year nursing students, to improve training.

Methods: Subjects were 32 2nd-year students from the Department of Nursing, School of Health Science, Hirosaki University of Health and Welfare. We conducted an open-ended questionnaire survey before and after clinical training in nursing. We categorized the content obtained into "perceptions of clinical training in nursing before training" and "perceptions of clinical training in nursing after training."

Results: From the 32 subjects, 17 (53.1%) responded to the pre-training survey, and 21 (65.6%), the post-training survey.

Discussion: Students had expectations and fears regarding the training before it began. Their interest was focused on nursing processes and techniques. The exercises conducted before training may have affected their interest. Besides, there was a sense of unfairness regarding the differences in distance between facilities for training. Because training facilities are widely scattered.

The results of the post-training survey suggest the students faced a difficulty in applying during training, the knowledge acquired in the previous two years. However, some students were aware of how much they had grown over this period and felt a sense of fulfillment. It is likely that the training environment played a significant role in this.

Key Words: nursing student, clinical training in nursing, learning situation